1/28 赤旗

米軍横浜ノース・ドック 新編部隊

出撃・訓練拠点化の危険

対中国揚陸作戦を支援

日米外交・軍事担当閣僚による安全保障協議委員会（2プラス2）で米陸軍横浜ノース・ドック（横浜市神奈川区）への新編が明らかになった揚陸艦運用部隊は、東シナ海・南シナ海での米軍の対中国軍事作戦の支援を目的に臨時に新設した部隊であることが分かり、米国の文書で分かりました。米陸軍、海兵隊がインド太平洋地域で実施する軍事作戦に即応するために首都圏を出撃・訓練拠点化する危険があるもので、平和団体からは「ノース・ドックを米軍の作戦拠点として強化するものだ」と批判の声が上がっています。（佐藤つよし）

「2プラス2」で示された「小型揚陸艦部隊」は、今年春に新編を予定し、艦艇13隻、兵員約280人規模。英語の原文では「混成揚陸艦中隊」（CWC）です。

大規模戦闘へ運用

CWCによる支援は、米陸軍の多領域作戦（MDO）、海兵隊の遠征前進基地作戦（EABO）など日本列島、南西諸島、台湾、フィリピンを結ぶ中国の防衛ライン「第一列島線」内での対中国の大規模戦闘作戦で島しょなどを占拠、武器・弾薬・兵員などを海上輸送し前線拠点を構築するものです。2019年に米陸軍が保有する大型汎用揚陸艦（LCM）・揚陸艦行動支援船II（MSV（L））4隻、小型タグボート2隻で構成します。

米太平洋陸軍のチャーリーズ・フリン司令官は昨年10月、CWCを「25年までに日本に移転する」（米国陸軍協会ニュース）とも明言しています。

すでに横浜ノース・ドックには、第836輸送大隊と、インド太平洋地域の軍事作戦に備える即応機動艦としてCWC2個分のLCU12隻、LCM9隻、小型タグボート4隻が配備されています。これまでは間輸送大隊がこれらの装備を一時的に運用することはありましたが、部隊の新編により恒常的に整備・運用な揚陸艦の運用が狙われています。

昨年11月の日米合同統合演習「キーン・ソード23」では、21年10月に米本土で新編されたCWCが輸送任務を実施。那覇軍港を拠点に高機動ロケット砲システム（HIMARS）や車両など米陸軍・海兵隊、隊員の物資などを輸送しました。

厚木・富士と結び

LCUはこれまでも日米合同演習などで車両輸送などを実施。21年9月の陸自の演習ではノース・ドックから米海軍佐世保基地（長崎県佐世保市）まで陸自機動戦闘車3両を輸送しました。

最前線に直結し最初の攻撃目標

神奈川県平和委員会 菊池幹夫事務局次長の話 日本の「海の玄関」といわれる横浜港のど真ん中の基地が「最初の攻撃目標」にされるのではと、地元に不安と恐怖が広がっています。

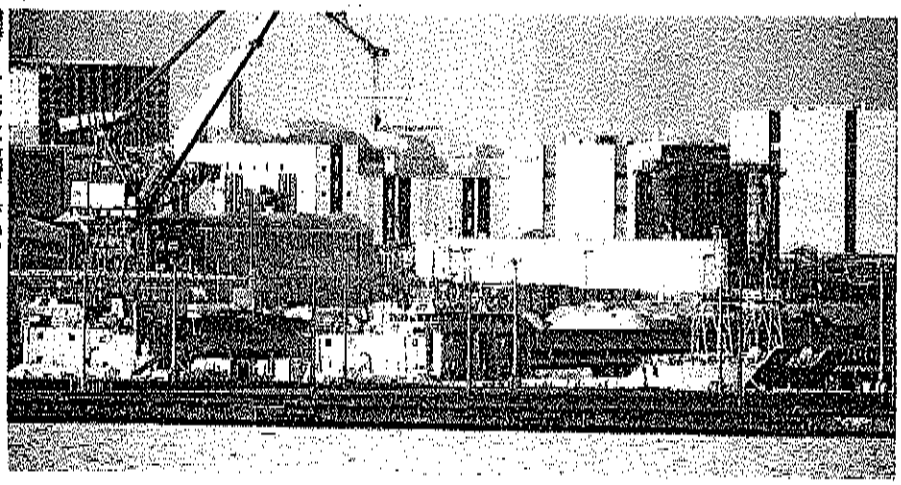
米中戦の最前線に想定される南西諸島に、弾薬・装備を運ぶ部隊が新しくつくられることは、横浜ノース・ドックを物資の保管・貯蔵の基地から戦場の最前線に直結する戦闘維持・出撃拠点としていく大転換です。

これまで政府は、ノース・ドックにある揚陸艦は「燃料を入れず、保管するだけで、運用はしない」と説明してきました。何の説明もないままなりひっくり返すことなど到底認められません。

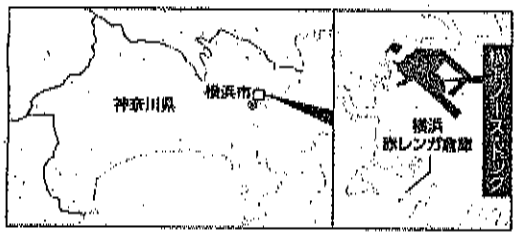
CWCのノース・ドック配備は、「2プラス2」で明らかになった在神奈川海兵隊第12海兵連隊の「沿岸海兵連隊」（MLR）への改編とも連動しています。

EABOをになうこれら沖縄の米海兵隊は、東富士（静岡県）、北富士（山梨県）両演習場を含むキャンプ富士を中核拠点として日常的に訓練を実施。この訓練に米海軍厚木基地（神奈川県）を拠点に利用する海兵隊のオスプレイやヘリが上空から支援する訓練をしています。静岡県沼津市の米軍沼津演習訓練場はベトナム戦争以来といわれる大規模な揚陸訓練も行いました。

横浜ノース・ドックへのCWC配備は、沖縄と首都圏周辺を連携させて、陸海空一体とした米海兵隊の出撃・訓練拠点にしていく動きです。



横浜ノース・ドックに配置されているLCU200米海兵隊揚陸艦（LCU）。横浜市神奈川区



多領域作戦（MDO）と遠征前進基地作戦（EABO） 陸海空の従来の戦場から宇宙・サイバー・電磁波・情報空間などの領域まで一体で作戦する構想。米陸軍のMDOはサイバー攻撃や極超音速ミサイルなどで相手の射程圏外（スタンド・オフ）から長距離火力・防空システムの破壊、指揮・統制システムの妨害、射程圏内での通常戦まで実施します。EABOは、中国を想定し米海兵隊が海軍と一体で第一列島線内（スタンド・イン）の離島を奪取し、対艦・対空ミサイルなどで制海権を確保し前進基地を構築する作戦です。